



Young Leaders Build 2019 ～僕たちが築く未来～

健全で豊かな生活を営む基盤には、安心・安全に暮らせる住まいが欠かせません。ハビタット・フォー・ヒューマニティでは、ボランティアとしてサポーターとして活動に参加くださる企業や団体、個人の皆さんと手を取りあい活動しています。その中でも、次世代を担う若者の参加に積極的に取り組んでいます。本部のあるアメリカをはじめ、日本やシンガポール、韓国などでは、ハビタットの活動に参加する学生主体の団体を「キャンパスチャプター」として組織し、所属する学生が国内外の活動にボランティアとして参加する機会を提供するだけでなく、学生による啓発活動や募金活動をサポートしています。また、アジア太平洋地域の若者を対象に毎年「Habitat Young Leaders Build(HYLB)」キャンペーンを展開し、「Play, Lead, Share」を合言葉に、アジア各国の若者が国内外の活動に参加しています。SNSやイベントを通して声をあげ、各国の若者が互いに刺激を与えあうアジア最大規模のユースキャンペーンに今年も日本から多くのキャンパスチャプターが参加しました。

海外で家を建て、国内で住環境の改善に取り組む

昨年12月5日の国際ボランティアデーを皮切りにスタートしたHYLBでは、約5カ月に及ぶ期間中に781名の若者が海外建築ボランティアプログラム(GV: Global Village Program)を通じて、12カ国で68世帯の住居建築支援に携わりました。一方国内では、3月29日(金)に実施した国内居住支援プログラム「プロジェクトホームワークス(PHW: Project HomeWorks)」に多くの若者が参加しました。関西や愛知県などから初めて参加するメンバーも多く、午前中はハビタット・ジャパンのスタッフが社会課題を含めPHWの実施背景を伝えました。その後なぜ学生の取り組みが必要か、学生ボランティアとして担える役割は何かを考える時間を持ち、共有しました。午後は4グループに別れ、高齢や障がいを持つ方(ホームパートナー)のお宅を訪問しました。身体的な能力や機能の制限により片付けが困難な方のために、部屋の片づけや衛生状態を良くするための掃除を行うなど、少しでも生活しやすきできるよう、力を合わせて住環境の改善に取り組みました。

関西から参加した同志社大学4年生の山崎菜さんにとっては、国内での活動はこの日が初めて。「日本は先進国といわれますが、意識してみると高齢や障がいがあることで不便な生活や不適切な環境で暮らしている人がいるということを知る、気づく一日になりました」と山崎さんは活動からえた学びを話してくれました。

より良い未来を築くには、社会課題に目を向け、課題に取り組む若者の参加は欠かせません。ハビタットでは様々な活動機会を通じて、今後もユースリーダーの育成に取り組んでまいります。



「ボランティアだからこそ頼めることがある」

ハビタットに寄せられる支援依頼の中には、地域福祉を見守る保健師さんやソーシャルワーカーの方々から寄せられるニーズも増えています。保健師の関根さんは「近所の人でも血縁でもご友人でもない、ボランティアさんだからこそ打ち明けられる、求められる助けがあります」と話します。また、「人は人との関わりの中で発達する」とも教えてくれました。

PHWに学生が参加することで、ハビタットは、活動を通じて出会うホームパートナーが心を開き、家そのものが適切な状況になることを期待する一方、学生ボランティア自身にとっても多くの学びがあることを期待しています。

ハビタット・ジャパンが2016年から継続的にGVチームを派遣することで支援にあたるインドネシアのジョグジャカルタ、セロパオロ村(セロ村)で、今春2軒のコミュニティセンターの建築支援が実現しました。



ライスフィールドに囲まれたセロ村は、雨季には緑が広がるのどかな村です。農作物が主な収入源となるため、村民の80%近くが農業に従事しています。しかしながら、セロ村に暮らす14,387名、4,615世帯のうち、政府の調査によると68%が貧困層に属しており、ハビタットが住居の建築を支援する世帯の平均収入は月100ドルにも満たない状況です。日本からは、これまでに26チームをセロ村に派遣し、合計49家族の住居建築を支援してきました。そしてこの春、遂に住民から要望としてあげられていたコミュニティセンターの建築が実現しました。

コミュニティセンターは各地区の会合の場として使われる以外にも、その用途は多岐にわたります。月に一度、女性グループと男性グループが集会を行うほか、インドネシア政府が推奨する「Posyandu(ポスヤンドウ)」と呼ばれるヘルスプログラムを開催する場所として利用が予定されています。このヘルスプログラムは0～5歳の乳幼児を持つ母親へ子ども用のサプリメントを配り、子どもの栄養教育、健康管理について教えるクラスです。村内には、若い年齢で結婚し、暮らしが豊かでない中子どもを産む母親も多く、体が小さく成長が遅い子どもを減らすためにヘルスプログ

ラムが必要とされています。同様のプログラムは60歳以上の高齢者にも行われ、健康管理について教えているそうです。

また、インドネシアには「skilled training (職業訓練)」と呼ばれるものがあります。これは、大学で専門分野を学んでいる4年生が、自分が学び得た技術を他の人に伝授するものです。女学生は伝統工芸のバティック染色や裁縫を教え、男子学生は肥料の正しい使い方やコナツツ木炭の作り方など、農業関連の技術を伝授します。正しい技術を習得せずにこうした職業に就く中年層も多いため、職業訓練は有効だと言われています。その他にも、コミュニティ内の子どもたちに伝統舞踊を教える練習の場とするなど、住民の集う場、協力し合う場、学び合う場、健康を守る場としての活用が期待されています。

コミュニティセンターの建築を支援した地区の一つ、ランテング I の地区長スカンダーさん(39)は、ハビタット・ジャパンがコミュニティセンターの建築まで支援してくれるとは想像していなかったと言います。だからこそ、この春に日本から50名もの学生がセロ村にやって来て、毎日汗をかいてセロ村の住民のためにコミュニティセンターを建てる様子を目の当たりにし、ボランティアをはじめ寄付をくださった方々に抱く感謝の気持ちは言葉に表せないと話していました。

住みよい生活の基盤を築くには、きちんとした住まいに加え、日々の生活を支える地域コミュニティは欠かせません。コミュニティセンターの完成は5月末を予定しています。



地区長の
スカンダーさん



ハビタットが取り組む水と衛生の支援：インドの子どもに安全なトイレを

6 安全な水とトイレ
を世界中に



ハビタット・ジャパンは株式会社LIXILが世界の衛生環境改善を目指したCRM「みんなにトイレをプロジェクト」(2018年4月～9月)のパートナー団体に選ばれ、インドとミャンマーでLIXILが開発した開発途上国向け簡易式トイレシステム「SATO」の設置支援や提供に取り組んできました。

13億人の人口を抱えるインドでは、その約40%が屋外排泄を行っているといわれています。背景には人口の80%が信仰するヒンドゥー教の「浄」と「不浄」の概念の影響や、長年培われてきた生活習慣、貧困など複雑な事情があり、各家庭への汲み取り式トイレの普及が進みにくいといわれています。ハビタットは各地域で住民を集め、SATOトイレシステムのメリットを住民に直接伝える機会を持つてきたほか、屋外排泄により引き起こされるリスクを説明することで衛生に関する正しい理解を促してきました。

こうした活動を通じて、インドでは3つの地域で計360世帯へのSATOトイレシステムの提供と設置が決定、この春に支援を完了しました。SATOトイレシステムの設置を日本からご支援くださったみなさま、ありがとうございました。

カンボジア：安全な水を必要とする400万もの人々に水と衛生を支援



国際社会が2030年までの達成目標として掲げた「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」の一つ、「ゴール6：安全な水とトイレを世界中に」は住まいの支援に取り組む中でハビタットが実現を目指すゴールの一つです。健全で豊かな生活を営む基盤には安全な水とトイレは欠かせません。ハビタットでは、インドをはじめ、水と衛生の支援が必要とされる国々でゴール6の実現に取り組んでいます。

その一つが、今春も日本から最多となる11チーム168名を派遣したカンボジアです。カンボジア全体でみると、400万人もの人々が安心して利用できる水にアクセスができない上、600万を超える人々がトイレを利用できない状況にあります。特に、世界遺産があることで有名な古都シェムリアップは、喫緊の課題を抱えている地域の1つです。シェムリアップ州は全25州の中でも3番目に貧しい州で、人口の25%が適切な住まいでの暮らしが出来ておらず、約5,000世帯が道路や川沿いなどに違法に住居を構え生活しています。また、家を持っていたとしても、その半数近くの家にはトイレが備わっていません。こうした状況を受け、ハビタットでは、住居支援を行うホームオーナー家族へは必ずトイレの設置を行うことに加え、子どもたちへの衛生教育にも力を入れてきました。

この春、5年前に日本のボランティアで給水塔の設置支援と衛生教育を実施したシェムリアップ近郊の小学校をスタッフが再訪しました。

給水塔ができるまでは学校には井戸しかなく、鉄サビの匂いにする井戸水を飲むほかありませんでした。現在使用している給水塔には、鉄分など含有物を除去するフィルターが取り付けられているため、子どもたちは安心して水が飲めるようになりました。生徒の中には空のボトルを持参し、給水塔から水を汲んで教室で飲んでいる生徒もいます。給水塔ができてからは、新年度毎に先生が生徒に手洗いを含めた衛生教育を行うことで、食事の前後に子どもたちが手を洗うようになったそうです。「今はこの給水塔のおかげできれいな水を飲むことができるし、子どもたちに手洗いの習慣が身に付いたよ」と、校長先生は教えてくれました。安全な水は健全な生活を営む上で欠かせない生活基盤です。ハビタットでは引き続き安全な水やトイレへのアクセスを支援することできちんとした住まいの実現に取り組んで参ります。



ハビタット・ジャパン設立15周年記念を迎えて

ハビタット・ジャパンは多くの企業や団体、個人の皆さまからサポートを頂き、昨年の11月に法人設立から15周年を迎えることができました。11月28日には「ハビタット・ジャパン設立15周年記念チャリティパーティー」を開催し、設立以来ハビタットの活動を支えてくださるサポーターをはじめ、キャンパスチャプターの卒業生や企業、団体の皆さまなど総勢150名にお集まりいただくことができました。ハビタット・フォー・ヒューマニティの本部からは日本法人の設立に関わったアジア地域統括のリック・ハサウェイが来日し、15周年を迎えることができた謝辞を述べました。また、日本での法人設立の背景には多くの若者による後押しがあり、以来、日本はユースボランティアを牽引する国の一つに成長した経緯が紹介されました。その他にも、ゲストスピーチやライブパフォーマンスのほか、ハビタットを日頃から支える企業、財団、個人の方々からご提供いただいたハンドバッグや腕時計、工具やアート作品にいたるまで様々な景品のあたる抽選会を催し、楽しい雰囲気にも包まれ会を運ぶことができました。また、プログラムの中で紹介させていただいたプロジェクトに多くのご寄付をお寄せいただくなど、15年の歩みから新たな一歩を築く一夜となりました。

世界にはいまだ16億人もの人々がきちんとした住まいを必要としていると言われています。住まいは私たちの生活に欠かせない基盤であり、きちんとした住まいの実現は健康や就労、教育の機会をもたらす、家族に、そして次の世代に変化をもたらします。次世代を担うユースリーダーの育成をはじめ、多くの個人や企業、団体の皆さまと手を取りあい、今後も国内外で住まいの支援に取り組めるよう尽力して参ります。引き続き活動へのご参加・ご支援を賜りますようお願いいたします。

Served
24 countries

Mobilized more than
18,700 volunteers

Served
27,000 families



ハビタット・ジャパン チーム一同

ハビびと

全国44キャンパスに拡大したキャンパスチャプター。その一つ、明治学院大学ハビタットMGUを2017年に卒業した小門紗樹さんは、ハビタットの活動を機に今の自分があると話します。学生時代の学びを生かして社会人となった小門さんのストーリーはこちら：

私は小門 紗樹です。ハビタットの活動を機に教員を目指し、小学校で働いて1年になります。

大学の時に、GVでの住居建築支援やフィリピンの村でのコミュニティ支援、東日本大震災後の東北支援などに参加しました。どこへ行っても、「支援」とうたいながらたったの数週間しか関わりが持てないこと、日常生活に戻ると何もし続けられないこと、そしてそこで出会う人たちはそのことが分かっているが私たちと関わってくれている、ということに悶々としていました。だからこそ、その中で何度となく言われた「忘れないでほしい」という言葉が、毎回心に残りました。足を運び続ける事は出来ないけれど、出会った人たちを忘れずにいて、多くの人に伝えて、今の自分たちに出来ることを一緒に考えていくことならできる。そう思ったことが教員を目指した理由のひとつであり、モチベーションとなっています。

そして先日、教員になって初めての3月11日を迎えました。今教えている4年生は当時2歳だったので、東日本大震災の記憶はほとんどありません。朝、全校で黙とうをしましたが、おそらくその意味も分かっていなかったのか、雑談的に被災地の話をしました。海辺の銀行で、「ここなら大丈夫だろう」と思って屋上に逃げたのに津波に流されてしまった人がいたということ、地震の揺れだけではない多くの被害があったこ

となどを伝えました。「15時前なら、小学生は下校中だったかも？」と考える子もいたので、集団で逃げ遅れ津波にのまれた小学生の話もしました。『つなみてんでんこ』津波が来たら、バラバラになり、自分の命を守ろうという意味のこの言葉も伝えながら、色々なことを考えました。

黙とうをする中で、大船渡を訪れた際にハビタットのスタッフの方が「身近な人を大切にしたい」と涙ながらに伝えてくださったシーンを鮮明に思い出しました。その地に住んで、被災された方の想いを全身で感じてきたからこそその言葉。出来事を忘れられないように伝えていくことはもちろん必要ですが、リアルに感じてもらうには限界があると思います。その想いもあり、子どもたちには自戒の念を込めて、防災と、「身近な人を大切に」というふたつのメッセージを伝えました。より自分事として捉えられるように。

ハビタットを通して知った想いを忘れず、少しでも何かを考えるきっかけになるよう、方法や環境にこだわらず、これからも伝えていきたいと思っています。



右端が小門さん

【訃報】ハビタット・ジャパン事務局の設立にご尽力いただき、初代キャンパスチャプターの一つ京都外国語大学「Kyoto Gaidai Habitat」の顧問を長年お務めくださったレイグ・スミス教授が2019年1月3日にご逝去されました。ここに生前に賜りましたご厚誼に感謝し謹んでご冥福をお祈りいたします。



認定NPO法人
ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン

東京都新宿区新宿 5-11-25 アソルティ新宿 5 丁目 301
TEL (03)-6709-8780 | FAX (03)-6709-8787 | info@habitatjp.org | habitatjp.org